

Textile no.23

東京農工大学科学博物館・友の会会誌 2020年（令和2年）1月

友の会

40周年を迎えます

伝統工芸の技と精神は
先輩から後輩へ
引き継がれ
新たな息吹も
生まれています

「当博物館は、”繊維”という特徴があります。それに関わるサークルが生まれ、活動を支援することは、価値ある機械や道具類を展示保存する博物館として、古い技術も残し伝えていくという、大きな意義があります。

また地域との交流も大切な役割の一つです」
(元館長 金子六郎先生)

ここは教えてもらうのではなく、自ら学ぶ場である
(卒業生の言葉)

30周年特別記念誌から抜粋

友の会ご案内

友の会は会員の学習や研究などの便宜をはかると共に、東京農工大学科学博物館の活動を支援し、その発展に寄与することを目的として昭和55年に発足しました。

活動内容は以下のとおりです。

1. 講習会や催し物などの開催
2. 広報活動
3. サークル活動
4. 博物館事業への協力
5. その他本会の目的に沿った活動

Textile 23号内容

- ・館長、新任教員挨拶
- ・40周年
- ・2019年度活動報告
 - サークル作品展 (*2018年度報告)
 - サークル活動紹介
 - サークル講習会
 - 支援・広報活動
 - 友の会案内（現況、組織、入会方法等）
- ・科学博物館案内

友の会との思いで

高木康博（科学博物館館長）

今年度で博物館館長としての任期を終えるため、私が Textile 誌に館長として文章を書かせて頂くのも、これが最後になります。

3年前に館長に就任したときのことを思い出すと、博物館は工学部のキャンパス内にあるにも関わらず遠い存在で、右も左も分からず困ったことを覚えています。友の会の皆様も、不安な気持ちで見ていたのではないかでしょうか。それでも、博物館を良くしたいという責任感だけはあり（自分で言うのも何ですが）、友の会の方々が暖かく接してくれたこともあり、館長を務めてくることができました。友の会の発足式・総会と修了式での挨拶や修了書授与をする中で、多くの人たちが属している組織の長をしていることを実感しました。また、ワークショップや作品展に参加させて頂き、友の会の活動の凄さを知ることができました。

私としては、3年間で、友の会との距離が少しずつ縮まったと感じられたことを嬉しく思っています。最初は、友の会の方々から、かなり遠慮気味にアプローチして頂きました。その後、話し合いの場を何度も、風通しの良い関係が作れたのではないかと思います。私から、大学の創立記念祭と共同開催にした国際博物館の日関連イベントでバザーの実施をお願いし、時間的に厳しかったにも関わらず、快く引き受け頂きました。また、友の会の活動場所の環境改善にも少しは貢献できたと思います。最近では、正式な話し合いの形を取らなくても、気軽に話ができる関係になれたと思っています（あくまで、私から見てということですが）。

友の会の人たちと接していると、人間としての魅力を感じます。もちろん、多くの方はそれなりの年齢を重ねていますから、生物学的なことを言っているわけではなく、内面的な魅力です。自分のやりたいことをやっている充実感、それをするための覚悟を感じます。皆さんの話し方や態度を見ていると、少し羨ましい気持ちになることがあります。私も、大学教授として自分のやりたい研究をしていて、好きな研究ができるから大学の雑務も引き受けいますが、興味に対する純粋さという意味では友の会の人たちには敵わない気がします。

私の任期中に、葵町製糸場のクラウドファンディングの成功など幾つかの出来事があり、大学内の博物館の評価が高まりました。11月25日付けの文部科学省発表の文章のなかで、注目に値する活動として取り上げられました。私としては、友の会の活動は、博物館だけでなく大学としての地域貢献活動の核として評価されるべきであると考えています。また、友の会の活動は、博物館にとって大きな資産であると考えています（民間のカルチャースクールの運営を考えたら大変な金額に相当します）。

最後になりますが、会長として友の会をまとめて頂いている国眼先生、運営を担って頂いている役員の

方々に感謝致します。また、サークル活動だけでなく、ボランティア活動や博物館の清掃などを気持ち良く行なって頂いている会員の皆様に感謝致します。皆さんに支えられて館長を勤められたことを幸せに思います。友の会の更なる発展を心より祈っております。

高木 康博(東京農工大学 教授／科学博物館館長)
(Takaki Yasuhiro／工学府 電気電子工学専攻・工学部 電気電子工学科)

新任のご挨拶

棚橋 沙由理(科学博物館 学芸員)

令和元年10月16日付で科学博物館の特任助教に着任しました棚橋沙由理と申します。前職は、東京工業大学博物館にて展覧会やサイエンスイベントの企画発案・運営などを担当し、教育普及に力を入れた活動に取り組みました。大学院で専攻・修了した学問分野は細胞生物学ですので生物学の出身ですが、理工系の学問全般および科学と社会の関わりに幅広く関心を持っています。また、これまでに国立科学博物館や出身大学で科学コミュニケーションの理論と実践を学んできました。科学と社会のより良い対話方法の模索に加え、生み出された技術を適切に使用するための倫理観なども興味の対象です。

前所属の東工大も農工大も同じ国立理工系大学なので、共通するコレクションも多くありますが、農工大博物館では友の会の皆さまをはじめとする博物館支援団体との連携が大きな特色だと思います。友の会の皆さまによる熱心なご活動が、日々の博物館運営の下支えになっていることを強く感じています。実際に、博物館展示室の一室では織機とともに皆さまの作品が、「現在進行中」の形で展示されており、まるで息づかいが聞こえてくるかのようです。皆さまの熱力に力をいただきながら、私も農工大博物館のメンバーとして少しでも早く一人前になれるよう邁進する所存です。

さいごに意気込みを語らせてください。こちらでは、皆さまとの連携・協働に根差した博物館活動を展開しつつ、お力を借りながらさらなる新たな活動の在り方を提案していきたく思っています。そのような活動が、先人たちの守ってきた有形・無形の学術コレクションの継承や価値の再発見につながればと思っています。まだまだ至らぬ点が多いかと思いますが、なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。

棚橋 沙由理(東京農工大学 特任助教／科学博物館学芸員)
(Tanabashi Sayuri／東京農工大学科学博物館)

友の会 40周年

2010年、友の会30周年記念行事を実行してから10年がすぎました。

友の会は元博物館館長・金子六郎先生が欧米の市民参加型の博物館を範として、生涯学習の場を織維博物館に導入を意図したことから1978（昭和53）年発足準備、1980（昭和55）友の会会員募集、翌1981年からサークル活動も開始されました。

全国の工房を訪ねて教えを請い、関連書や専門書を読み込んで文字通りの研究会が、織維博物館の後押しで発足し、サークル活動が始まりました。立上げ当時の方が「入ったのではなく作ったのよ」と表現したように、試行錯誤しながら先輩方が積み上げたサークルです。特定の講師によらない、先輩が後輩を指導し文化と技術を伝えていくシステムが確立したのが1986年です。

30周年行事を終えた翌年の3月に東日本大震災発生、ちょうど博物館の耐震・機能改善リニューアル工事が重なり、友の会も休会、1年半後に活動を再開しました。この間に、友の会と博物館の関係性を改めて協議し、従来の会則改正と細則・活動規約を発行。現在の組織の体制が整い、サークル存続のために1学年5人5年制から4人4年制へ移行しました。

友の会は、博物館の施設、展示物の織機、紡毛機等の用具も利用し、館内ののみでなく大学構内、府中地区のFS関連施設の農場、演習林にも採取のご許可をいただいている。他の博物館にはみられない、農工大だからこそ様々な環境に恵まれた活動が可能になっています。友の会も東日本大震災で被災した南相馬地区の復興支援活動を契機に、《手仕事で支えあおう》自らが社会に貢献する支援活動も活発になりました。対外的な活動も、常に農工大科学博物館の名前が我々の活動に信頼性を与えてくれます。今後も博物館教職員のご指導、ご協力を受けながら、次世代へ引継いでいきます。

下図は「友の会歴史年表」の簡略版です。来し方の概略をご覧ください

40年の歩み

科学博物館（織維博物館）友の会サークルの歩み

<変遷>	東京農工大学 工学部附属 織維博物館 友の会「研究会」		東京農工大学科学博物館 伝統工芸会 「グループ」	東京農工大学科学博物館 友の会「サークル」
上段は継続活動中10 下段は中止4サークル	1981-1989 1990-2008		2009-2012	2013-2019
織物	1981-			
ひも結び	1981-			
組ひも	1981-			
手紡ぎ	1981-			
レース	1981-			
型絵染	1984-			
藍染	1984-			
紬瑠(つる)かご	1984-			
わら工芸		1990-		
絹	(同窓会製糸部会女子部の流れをくみ活動)		1997-	
和紙絵の会	1982-		-2012	
手編の会		1990-		-2013
刺しゅう研究会	1982			
パッチワーク会	1984-1986			
【指導体制】	講師	1986 マネージャー体制開始 4年制+マネージャー 5人5年制度	2013- 4人4年制度開始	
		顧問教官制度開始 1989--	2016/	
				織維博物館から科学博物館へ

サークル作品展

※本報告は作品展実施時期と本誌発行日の関係で1年遅れになります。

第37回サークル作品展

2019年2月2日（土）～9日（土）に実施。4日（月）は休館、最終日は午後2時終了。

会期中の観覧者数、3049名。2日ほど雨や雪の日もあったが、概ね晴天に恵まれ、さらに博物館の企画展と同時開催されたせいか、多くの方に観ていただくことができた。

展示場所も1階から3階と例年より広く使わせてもらい、展示する側からも観に来ていただいた方からも、ゆったりとした中で鑑賞することができてとても良かったという声を多数いただきました。実演や体験を行うサークルも多く、来場された方たちも十分に満足されたのではないでしょうか。



1階 ひも結び 組ひも 手紡ぎ 型絵染



2階 織物 絹



3階 藍染め わら工芸 レース つるかご OBG



第38回作品展は、2020年2月1日～8日 開催



サークル活動紹介

絹サークル

[毎週 火曜日]

1年	精練(繭)、真綿作り(角・袋)、糸作り(摺りだし・太真綿糸)、作品作り(太真綿糸マフラー)
2年	精練(繭・緒糸)、真綿作り(角・袋)、糸作り(結城紬ぎつくし・スピンドル紡ぎ・電動紡ぎ)染色(緒糸)緒糸組マフラー、煮繭(手繰り)、共同作品作り
3年	煮繭、生糸作り(座繰り)、精練(生糸)、染色(絹糸)撚糸学習、検尺実習、自動織糸、作品作り
4年	マネージャー、自己研鑽 ・見学会：農工大津久井農場・島田先生講義、実習 ・館外学習：岡谷蚕糸博物館、宮坂製糸所見学(岡谷の養蚕と製糸業の歴史を学ぶ、織体験) ・ボランティア：国分寺第十小学校 ・講習会：9月 草木染の真綿ネックウォーマー

私たち日本人は昔から、蚕を飼育し、繭から真綿を作り、糸を紡いだり、挽いたりして生活に活かしてきました。受け継がれてきた繭の利用法を学び、真綿や糸をつくることの大切さや楽しさを継承していくことをテーマに活動をしています。

1年次では、真綿づくりを学びます。昔は、糸に挽けない“くずまゆ”を使って真綿を作っていました。真綿をのばしたり、真綿から糸を繰り、紬糸などにします。その元の袋真綿や角真綿を作ることを学びます。

2年次では、糸を挽く時に出る“緒糸”を使い、染色し組マフラーを織ります。また、真綿から糸を作る“紬ぎ”や“手挽き”を学びます。

3年次では、絹糸を作る“座繰り”を学びます。4年次は、これらの学びをもとに後輩の指導や自己研鑽をします。

私たちは、先輩方から引き継いだ「糸を大切に扱う心」と実習を通して学んだ事を後輩に伝えています。また、小学校のボランティア・地域交流・講習会などを通じて、日本の絹の伝統を絶やすことのないように、日々楽しく学び活動をしています。



太真綿糸の実習風景

手紡ぎサークル

[月3回 2・3・4木曜日]

1年	羊毛を紡ぐ 羊毛の解毛・洗毛、スピンドルで紡ぐ、ハンドカーダー、草木染(藍の生葉染など)
2年	綿を紡ぐ 紡毛機で紡ぐ、綿や藍の栽培、電動カーダー、草木染、草木纖維の紡ぎ
3年	絹を紡ぐ 繭やキャリアの精錬・染色、羊毛と絹を混ぜて紡ぐ、草木纖維の紡ぎ
4年	後輩の指導・自主活動
※館外学習；町田市大賀藕絲館（9月） ※藍染めの見学・実習（11月）	

<サークルの主な活動>

<羊の毛刈り> 6月頃

彩の国ふれあい牧場の羊の毛刈りを行い、教材にします。羊と触れ合える貴重な体験ができます。

<講習会> 10月

毛刈りした羊毛を使い、一般の方向けに講習会を行います。今年はスピンドルで羊毛から糸を紡ぎ、紡いだ糸を使ってミニフレーム織りのコースターを作りました。

<作品展> 2月

1年間の集大成として、学年ごとに各自紡いだ糸とその糸で製作した作品を展示します。

羊毛、綿、絹などの自然素材を使い、一本の糸にするまでの大変さを知ることから、完成した時の達成感を喜びにする活動を行なっています。紡いだ糸で製作した編み物や織物は愛着の逸品になります。

そのほか、地域支援活動として、彩の国ふれあい牧場のイベントに参加し、スピンドルを使って羊毛の手紡ぎを来場者に体験してもらいました。



スピンドルで糸を紡ぐ1年生

藍染サークル

[毎週 金曜日]

1年	24種類の基礎絞り、染め	全員で藍を建て 管理します
2年	10種類の基礎絞り、染め	
3年	5種類の基礎絞り、染め	
4年	3年間学んだ技法を後輩に伝承し、各々の課題で卒業制作	
※藍建ては5月と9月の上旬に行います		
※藍の葉が育つ7月に生葉染めを行います		

藍染サークルでは、年2回5つの甕（かめ）の藍建てをします。タデ藍の葉を発酵させた漬（すくも）に木灰から抽出した灰汁を加える”発酵建て”です。1週間ほどすると液面に紫色の膜が張り、布を染められるようになります。良い色に染められるよう全員で藍の管理をします。

毎週金曜日の活動では、午前に布（麻や綿）を染め、午後に基礎絞りを行います。主に1年は縫い絞り、2年は各種の鉤針を使用する技法、3年はたたみ折り等を学びます。習った技法を生かし、伝統の技法に各自が描いたデザインを加え、オリジナルの作品を制作します。

毎年研修会を行い、専門家の技法や藍に対する考え方を学び、知識や見聞を広めます。

絞りを施した布の仕上がりは、染め上がるまで分かりません。思い通りに染まった時はもちろん、思いがけず良い表情が出ることもあり、絞りを解く瞬間はわくわくします。藍は生きているので、液の状態により染め上がりが違うのも魅力のひとつです。

藍染サークルで共に学び、藍の魅力に触れ、自分だけの藍染と一緒に楽しんでみませんか！



布を縫い絞る



藍で染める

型絵染サークル

[月2回 1・3木曜日]

1年	型絵の基本を学ぶ（綿） つりについて学ぶ（麻）
2年	地染めを学ぶ（絹） 筒描きを学ぶ（麻）
3年	連続柄 おくりを学ぶ（絹） 自由課題（麻）
4年	後輩に技術を伝える サークルをまとめる 卒業制作
※琉球紅型染めを基本として、博物館に保存されている型紙や資料を参考に型絵染を学びます	

型絵染サークルでは、型彫り・紗張り・糊置き・色差しという各工程に時間をかける為、1つの作品が仕上がるまでに長い日数がかかります。最後に糊を水で落とし模様がはっきりと見えてくる瞬間は、いつもドキドキします。

染色方法は琉球紅型の技法を基本としている為、顔料を使用しています。9色の顔料で人それぞれの色作りや色の組み合わせにより、同じ図案でも個性豊かな作品が出来上がります。

また、2年目に行う「筒描き」では、型にはまらない自由で大胆な作品作りをする事が出来ます。

講習会「型絵染クッションカバー」では、糊置きされたクッションカバーに参加者の皆さん好みの色を差して頂きました。

今年の館外学習は、渋谷区立 松濤美術館「美ら島からの染と織・色と文様とマジック」を見学しました。

私達はカリキュラムの都合上、学年ごとの作業が多いですが、皆で協力し合い楽しく活動しています。

自分で作る型絵染を、是非ご一緒に挑戦してみませんか？



作業風景



糊置き

織物サークル

[毎週 火曜日]

1年	つづれ織（フレーム織、堅機の共同作品） 平織、綾織、カード織
2年	色糸効果、レース織、浮織、変化綾織
3年	昼夜織、自由作品
4年	マネージャーとして活動

農工大科学博物館所蔵の貴重な織機を使わせて頂き、組織やデザイン、糸の特徴や糸量の計算など手織りについて多くのことを学んでいます。博物館の手織り機は、大正時代の高機をはじめ、北欧で使われている多綜続の織機など色々な種類があり、カリキュラムに応じてメンバーが交代で使います。ほとんどの機が一期一会のため慈しみながら作品を織り上げています。

学年毎のカリキュラムと並行して、館外活動や地域支援行事などが折々にあります。今年度の館外研修では、「ワイルドシルクミュージアム」と「中村織維工業(株)」を見学。初めて家蚕(かさん)や野蚕(やさん)の実物や繭・糸を見学し、蚕にも多くの種類があり、種類により吐き出す糸も白・緑や橙と多色で、紡がれた糸の違いもあり用途も異なります。また糸を紡ぐ体験や撚糸作業の見学を通して糸の知識を深め、織製作の参考となりました。博物館サマーフェスタでは、子供たちが初めて機織りを体験(コースター作り)し、秋の講習会では、織物サークル特製の手作り織機「簡易綜続」でミニマフラーを織りました。体験イベントや講習会は参加して下さる皆様の熱心さに接し、ものづくりの喜びを分かち合える有意義な一日となっています。

恵まれた環境の下、先輩から教わり、仲間と作品を織り上げる達成感、自ら探究していく喜び、織物を通じて得られる繋がりや感動を日々感じています。



制作風景



共同製作および高機に励む！

レースサークル

[月2回 第1・3水曜日] *9月までは月3回

1年	トーションレース（平織り、綾織り、重ね綾織り、トライアングル、ファン、ダイヤモンド、ローズグラウンド、スパイダー、リーフ、タリー、四つ組、ピコ、ストレートエッジ、ギンブ）
2年	ブルージュフラワーレース（ブレイド、ピボット、葉、花、スクロール）
3年	バックスポイントレース
4年	マネージャーとして活動・ホニトンレース ※時間と根気と繊細さを要するボビンレース。学年の前半で基礎を学び、後半では自由制作をします。

ボビンレースと聞いてもイメージするのが難しい人もいるかもしれません。中世のヨーロッパ絵画の中で王族や貴族の男性が身に着けている襟や袖口のレース、王妃など女性の着用しているレースのドレスがボビンレースです。

ボビンと呼ばれる棒状の糸巻きに糸を巻き、織り台（ピロー）の上で織ったものがボビンレースになります。細い糸で織った繊細なレースを現代の私たちが引き継いで織り上げているのです。

初年度はボビンレースの基礎となるトーションレースを学び、二年目はブルージュレース（花のレース）、三年目はバックスポイントレース（チュールレースとも言います）そして最終学年ではホニトンレース（イギリス王室の洗礼式衣装はホニトンレースを用いています）を織ります。先輩から受け継いだ貴重な専門書や資料を大切に使って同輩たちと楽しく活動しています。

是非、と一緒にボビンレースを織ってみませんか。



講習会風景



活動風景

組ひもサークル

[月2回 第2・4水曜日]

	基本組 玉数を増やした組み方 丸四つ組(4玉) 丸八つ組 平八つ組 角八つ組 金剛組(8玉) 老松組 丸源氏組(16玉)
1年	応用の組み方 金剛組 内記組 奈良組 十六千鳥組(16玉) 笛波組 御岳組 冠組(24玉)
2年	応用の組み方 吉原つなぎ 唐組(24玉) 貝の口(34玉) 大台亀甲 内記小紋(32玉)
3年	マネージャー 学年指導・自主研究

4年生の指導のもと、基本の丸四つ組から始まり、8玉・16玉、2年生はサークルで代々受け継がれてきた十六千鳥組、3年生になると平安時代に高貴な人々が身に着けたといわれる菱形模様の24玉唐組、さらに34玉までの課題に取り組んでいきます。着物の帯締めを基本に日常的に使える紐や根付けなども制作し、古来からの組ひもの伝統を受け継ぐべく楽しみながら活動をしています。

6月 講習会 組ひもでつくる「絹の眼鏡ひも」

8月 サマーフェスタ ミサンガ作り

10月 地域支援バザー

11月 課外活動 江戸組ひも職人 工房見学

2月 作品展 1年間の課題の展示

組ひもの楽しみや面白さは、色の組み合わせや配置により、同じ組み方でも組む人の個性が表現できるところです。ご家庭でも場所をとらずに作成できます。絹糸の手触りと、玉の触れ合う音に心も和みます。ご一緒にサークル活動を楽しみましょう。



6月講習会



活動風景

ひも結びサークル

[月2回 第2・4火曜日]

1年	基礎となる38種類の結びと応用作品 亀結びの色紙・お守り袋・立ち雛・干支(子) おひな様の色紙
2年	六瓢箪・伊勢海老結び・修多羅結び 根付け(亀・小海老・金魚)・香袋・お守り袋・ 小銭入れ・干支(子)
3年	繭入り香袋・アイルランドのケルト模様 仕覆結び・中国結び・ブローチ(ぶどう・水芭 蕉)・干支(子)・訶梨勒・百合の花
4年	マネージャーとしての活動

1年生初回のサークルは心なしか緊張するものですが、午後にはトンボや蝶が完成します。この時の喜びはひとしおで笑顔がいっぱい、この感動こそが結ぶ楽しさの原動力、サークル活動のスタートです。サークルでは基本結びから始まり、修了までには飾り結びを中心多くの作品を仕上げ作品展で展示します。先輩に聞き同輩と談笑して進級するうちに、結び加減、引き加減などいつのまにか身についている技術の向上にうれしい驚きを感じます。

人類が文明を築き始めたころ、実用として考案された結びでしたが、後の時代には実用ばかりでなく装飾、護符、縁起物など多種多様にわたり活用されてきました。結び自体に感謝、願い、祈りを込めたともいわれ、古今東西人々の生活に欠かせないものとして受け継がれてきました。珍しい例として、複雑な結びを施しての鍵の役割、マチュピチュに代表されるインカ文明では結び目を組み合わせての文字の役割、なども挙げられます。シールやテープなどの普及で結ぶこと自体が少なくなってきた現在ですが、靴ひもを結ぶ、プレゼントを飾るリボン、海山などアウトドアでのひもやロープ結びなど、今でも結構重宝されています。

どのような作品であってもはじめは単なる一本のひもです。しかし結ばれた作品には形があり美しさがあります。完成作品をイメージしながらレシピに沿って一行程ずつ結んでいく楽しさを、と一緒に体験できたらと思います。



活動風景

紬瑠（つる）かごサークル

[月2回 第1・3水曜日]

年間を通して全学年での取り組み	<ul style="list-style-type: none">構内でシュロの採集構内で樹皮、苧麻等の採集河口湖へ樹皮の採集旅行構内で苧麻の栽培農学部 FM センター唐沢山へつる採集旅行 <p>制作(シュロのかご、丸かご、乱れ編みのかご、樹皮を使った組かご、メロンかご、舟形のかご、縄ないの練習、コイリング、ブルキナ編みのかご、スカリ編み等)</p>
-----------------	---

古くからの生活雑貨の素材の中の竹、藁、籐(輸入)を除いた植物で、加工を加えずに造るのがこのサークルの目的です。

4月に構内の棕櫚（シュロ）、6月は河口湖国有林で樹皮、10月には農工大演習林唐沢山にて蔓の採取を行います。又、構内には苧麻畑、身近な野山には野ぶどう、葛、藤や野草があります。

作品制作の年間カリキュラムは全学年共通で1年に基本技術をマネージャーから学び、2年生以上は相互に教え学びながら技術を受け継ぎます。

作品制作は自由度が高く、自然の造形を巧みに各自自分の作品に取り入れた豊な発想や個性に溢れた作品となり、毎回作品を皆で講評し、苦労話やアイデア等情を提供し合います。

オリジナリティ溢れる作品を見る事が一番の勉強になり、次の作品作りのステップとなります。



河口湖にて

わら工芸サークル

[月2回 第2・4金曜日]

「縫う」「編む」「結ぶ」を基本に、技法の習得と伝承	
1年	縄ない、徳利結び、鍋敷き、履き物（わら草履、草履、わらじなど）、砥石袋、宝船、亀、など
2年	べんけい、円座、深ぐつ、みの、など
3年	えじっこ、米俵、ばんどり、げんpei草履、など

※農工大の農学部府中農場で先生の指導のもとに、6月には田植えを体験し、9月には稻刈りと脱穀を実施し、わら工芸の学習で使うわらを入手しています。

わら工芸サークルでは、稻わらを使って伝統的な日用品を作ります。主食のお米の副産物であるわらを、生活のあらゆる面に応用するわら工芸は、足もの資源を有効に活用する持続可能な社会の一つの象徴とも言えるかもしれません。手間と時間はかかりますが、既製品と違い自分の目的に合わせて大きさや形を自在に変える事ができ、使い終われば大地に還るわらは、多様で、よりエコロジーが重視される現代社会の流れにも沿っています。サークルで作る鍋敷き、円座、えじっこ（バッグ）、など、現代でも生活に役立つ道具は作り手によって個性が出るオンリーワンな作品に。使っていると友人たちから由来を聞かれ、わらにまつわる話題が広がる事も。正月飾りなどの縁起物も作ります。

また、今は実生活ではほとんど使われなくなった草履、砥石袋、簍、ばんどり（背負子）なども手がけます。石油由来製品に代用されたり、生活慣習自体が変わって見えなくなった道具たちですが、わらを編み込んでいく根気のいる作業を繰り返す中で、次第に立ち上がっててくる形は先人たちの知恵の結晶。どうしてこんな手順を考えついたのか、なぜそのデザインなのか、わら製用具に込められた思いをなぞることは、現代の私たちの生活を見つめ直すきっかけにもなります。

田植えや稻刈りの体験も交え、囲炉裏の周りでおしゃべりをしながらわらを編むような雰囲気の中で、わら工芸サークルの活動は行われています。一緒に座を囲む仲間をお待ちしています。

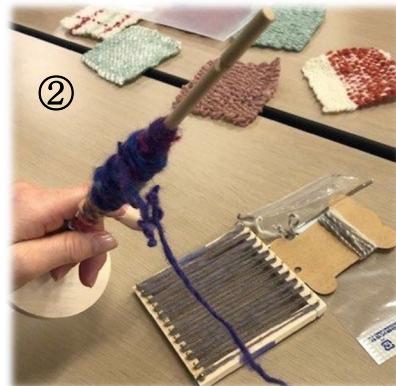


↑宝船製作中 稲刈→



2019 年度 サークル講習

年に一度、市民の方を対象に
講習会を実施しています。



⑨



図	サークル名	日 程	内 容	参 加
①	絹	9月 17日	草木染の真綿で作るふわふわネックウォーマー	18名
②	手紡ぎ	10月 17日	糸を紡いでコースターを作りましょう	19名
③	藍染	7月 5日	藍で染めるオリジナルストール	17名
④	型絵染	7月 18日	型絵染クッションカバー	20名
⑤	織物	10月 29日	ミニマフラーを織る	24名
⑥	レース	10月 2日	ボビンレースで飾るクリスマスカード	12名
⑦	組ひも	6月 26日	組ひもで作る「絹の眼鏡ひも」	16名
⑧	ひも結び	11月 19日	結ぶ楽しさ、飾るうれしさ 「 お花のブーケ 」	16名
⑨	紬瑠(つる)かご	12月 4日	里山からの贈り物 あけびの太づるをつかった丸かご	26名
⑩	わら工芸	12月 13日	正月飾りを作ろう	20名

支援・広報活動

手仕事でささえあおう

友の会の「支援活動」は科学博物館の支援団体として、1. 博物館行事への協力 2. 社会貢献活動 が柱となっています。《手仕事で支えあおう》のロゴは東日本大震災の復興支援時に生まれたものです。友の会の大きな部分を占めているサークル活動から得た工芸技術を、己のみでなく社会に還元していく精神が、博物館の社会貢献活動に大きな力を与えています。他に博物館周囲の環境整備作業も継続して取組んでいます。

博物馆支援活動

国際博物館の日 --- 農工大創立記念祭イベント ---

～農工大で博物館を楽しもう！～

5月25日(土)開催 構内でバザー／館内でワークショップ
来館者数 1143人、ワークショップ参加実数 422人

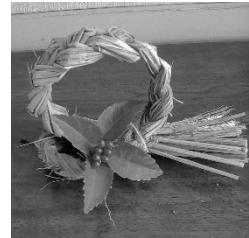
イベント協力で実施しているワークショップは、短時間で作品を完成させ持ち帰れるよう各サークルが工夫し、小作品ながら“本物”的伝統工芸の技を子どもが体験できる機会を提供しています

博物館サマーフェスタ 8月22・23日(木・金)

「せんいの技を実体験！」 --展示だけじゃ分からない ワークショップ参加者 469名

今回は前年の反省から1階に総合受付を設け／整理券枚数を明示／午前・午後同数の整理券を用意。体験希望者、迎える側、双方に受付時のストレスが減りました。

受付で渡された 体験カードを下げて、該当する箇所にシールを貼り「なんのわざ」か、意識化をはかり、カード裏面ではその技を具体化した機械・道具が「博物館にあるのか」「館の展示はどこかな」と博物館めぐりにつなげました。



わらでつくる



- サマフェス23日の午前中は講演会
- 講師：名誉教授 中村 俊 先生 “脳科学者の立場で子どもの育ちに何が必要か”
 - 友の会：「手仕事でささえあおう」南相馬復興支援活動の取組のいきさつ

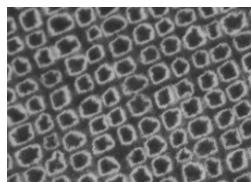
友の会 特別講座開催

【鹿の子絞りと植物染(草木染)】 <会員限定講座> 6月27日・7月27日 2回連続講座

講師：三谷 文子 氏 (ふみ絞染工房・藍染サークルOG一期生)

2回とも受講できる応募者から抽選で15名参加

絞った布は染めてこその仕上がりです。1回目の鹿の子絞りは器具を使い細かい手先の作業に集中、2回目の染は友の会の講座らしく化学染料は避け植物染（草木染）を選び、今回は玉ねぎの皮／こぶな草を用いました。



【講演会】 皇居紅葉山御養蚕所と農工大について <繊維技術研究会：共催講演会>

講師：小此木 エツ子 氏 9月24日 聴講者 約100名

小此木エツ子先生は本学製糸教婦科を卒業し、長年製糸学科で指導・研究をされ、友の会絹サークルもたびたびご指導を受けています。

かねてより小此木先生が皇居に上がられた体験をおもちと聞き及んでいましたので、繊維技術研究会の講

演会とタイアップしてお話を伺う機会を得ました。

農工大の皇室との関わりについての歴史、明治から昭和当時の生糸生産量、当時の製糸状況などの他、「そもそも製糸とは」の講義も挟まれ「科学する」小此木先生の本領も発揮されました。農工大の前身は養蚕と製糸の担い手の指導者養成の教育・研究機関でした。製糸教婦科の卒業生も各地に指導者として勤務。蚕糸学校初代校長の本多岩次郎氏が紅葉山御養蚕所を設計したご縁により、大正5年から昭和22年まで、本校の製糸教婦科の生徒3~4名と教婦が紅葉山御養蚕所で御生繭繰糸と真綿の製造を行っていました。学内製糸工場での製糸ご奉仕は昭和30年まで続きました。

講演会後半では実際に皇居紅葉山御養蚕所でご奉仕された方の手記を絹サークル生が朗読。

参考資料：製糸教婦史「絹のむすび」 東京農工大学同窓会製糸部会女子部記念事業会 昭和57 非売品

※「皇室の御養蚕所と農工大の関わりについて」は、講演要旨に簡潔にまとめられていますので、
本稿ではその点は省略しています。
(友の会 O.A.)

故郷の御家族が娘の名前を喜び十分なお支度を整える様、身を清めて皇居に上がる様子、皇后さまがお傍にお立ちになられると緊張してそれまで出来ていたのに指先が震えてしまったことなど当時の様子が窺われました。小此木先生の在籍は戦争末期のため、その頃は皇室から届けられた御生繭を校内で製糸するご奉仕をし、皇居にお届けしていましたが、その際、皇后さまから直接お声掛けをいただいたそうです。



図は「絹のむすび」から

地域支援活動

ののわ東小金井駅 「家族の文化祭」

科学博物館の地域交流事業として、JR東小金井駅で行われた「家族の文化祭」に参加。多くの方に農工大科学博物館を知ってもらい、地域の中での認知度を高めたい館の意向に協力です。

春：4月21日 <型絵染を体験してみよう> 参加者83名

事前に型絵に沿って糊をおいた布を用意し、アクリル絵の具で色を塗る作業です。

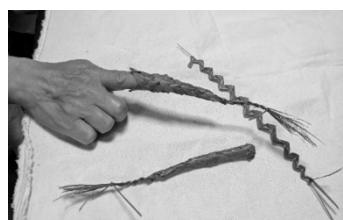
仕上がりは糊落としの後のお楽しみ。駅頭でのワークショップは、様々な年代の方々とふれ合える機会になりました。
(型絵染サークル OBG ほか会員有志協力)

夏：8月3日 <棕櫚（シュロ）の葉でへビをつくろう！> 参加者50名

かみつきヘビとによろによろヘビをつくりました。

猛暑の中、レストラン・カフェ街の扉の中でワークショップ開催です。冷風が漂う場所！扉の中は通行する方には見えにくくなるのですが、それでもお子さんを含め大人の方も、食いついたら離さないぞ！のヘビ作りに真剣に取組ました。

(紬瑠(つるかご) サークル OBG ほか役員有志)



支援バザー開催 10月19・20日 小金井なかよし市民まつりに出店

いつもの小金井公園で恒例の秋のバザー。

今年は15号台風のあとの大雨も続き、予報では午前中も雨。けれど実施時間には雨もあがり、無事開催できました♡ バザーはサークル作品が購入できる機会です。お買い上げありがとうございました。収益は支援活動経費として有効活用いたします。

(友の会10 サークル、OBG 協力)



真綿のうちわとしおりづくり

国分寺市立第十小学校 9月3日

三年生総合学習で 児童2クラス 62名

1. 真綿でうちわを作る
2. 蘭から糸をひいてしおりを作る

子どもたちは事前学習を経てこの授業を楽しみに待っています。

蚕の飼育を二齢でダメにしたとか、飼育過程を経てないのは残念！

農工大の蘭を使って授業です。(絹サークル全員)



—糸ひきに夢中—

市民活動支援

手紡ぎサークル

4年前より羊毛をいただいていた秩父高原牧場(通称「彩のふれあい牧場」)に、昨年・今年と有志数名で毛刈りに行きました。その際、「糸紡ぎのワークショップができますよ」と話していたことが実現し、牧場のお祭りに参加。牧場の来園者に牧場の羊の毛から毛糸ができるということを体験してもらい、紡いだ毛糸からいろいろな製品を作ることができることを理解してもらうことができました。

また羊等の飼育者の飼育舎との交流を通して羊への知見を深める機会にもなりました。

5月6日 秩父で春のワークショップ

来場者 69名 (協力会員 8名)

5月16日 手紡ぎサークルが長年毛刈りでお世話をいただいた農学部竹村先生の「ヒツジを語る」講義の実現、卒業生も参加して受講

9月26日 綿羊研究会の全国大会参加者が博物館を訪れました。サークル活動で毛刈りをした後の羊毛を洗う、解毛、紡ぐなど一連の工程を体験していただき、博物館の見学・視察をサポートしました。 (サークル代表 U.M)

現在、友の会に登録して月例活動しているサークル卒業生は8グループあります

サークル事務費を負担し、館のイベントに協力する“捷”もありますが、館外で活動しているグループも含めて5月のワークショップ、バザー開催など OBG 間の交流も行いながら楽しんでいます

藁の会 (ひこばえのかい) = わら工芸 OBG

12月7日に浦安市で行われましたアジアデザイン文化学会に出席いたしました。

この学会は千葉大名誉教授宮崎清様の呼びかけで、中国、韓国、台湾、インドネシア、バングラデシュなどアジアの諸国、諸地域に支部を有する国際的学術学会です。

このたび学会研究発表論文集に「藁の会」から小論文が3編、掲載されました。3編のうち小論文2編は日頃からの活躍内容や藁に対するそれぞれの思いなどが記された内容のものです。もう1編は10月27日に青森県弘前市「りんご公園」での「藁で作るりんご」の講習と作品展示のために行きました時の事をまとめたものになりました。

「藁の会」の活動は、通常の活動の他、地域(小金井市、府中、江東区、杉並区など)や富山県氷見市の神社の、注連縄飾りの指導などに出かけています。今後も技術継承と共に普及にもつとめていきたいと思っています。

(藁の会 M.M)

交流が続いている南相馬「ジャパンブルー」から、作品展に今年も藍染作品が届きました!!!

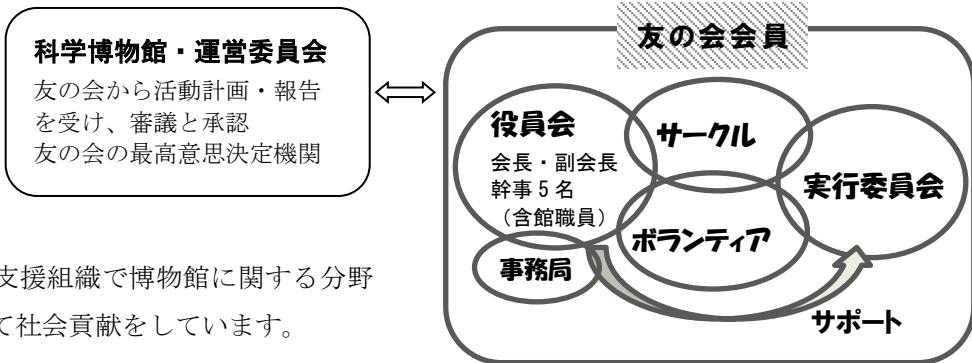
地域で活動されている OBGさんはもっと大勢いらっしゃると風の便りが届きます
ぜひ近況をお知らせください

✿ 友の会機関紙の Textile は1年間の友の会活動記録であり、広報の役割もあります

作品展実行委員会が「作品展報告」「サークル活動」ページを担当、役員会・事務局が全体を担当し編集作業を行っています

友の会組織

2019年12月1日現在
会員数 335名



友の会は博物館の支援組織で博物館に関する分野の学習と研究を通して社会貢献をしています。

友の会サークル活動

現在、下表のように10サークルがあります。
講師による教室ではなく、会員相互の自主的な活動です。先輩が後輩の指導にあたり、文化と技術を伝えていく、教えられ、教え合う、ユニークなシステムです。

1学年4人4年制、16名体制

最終学年の4年生が下級生を指導し、会の運営を担うマネージャ役を務めます。

2019年度サークル所属会員数 合計 152名
(2019年12月1日現在)

サークル名	人数	サークル名	人数
絹	15	レース	11
手紡ぎ	14	組ひも	16
藍染	17	ひも結び	16
型絵染	16	紬瑠(つる)かご	15
織物	16	わら工芸	16

委員会活動

各サークルからの選出メンバーで構成される
以下の委員会があり、サークル活動の運営、行事等の企画実行を行っています。

○代表者委員会…円滑なサークル運営のため、友の会役員会と各サークル代表が協議する組織

○地域支援実行委員会…社会貢献に取組むため
バザーを企画実行し支援活動資金に充てる

○作品展実行委員会…サークル活動1年間の学習成果発表の場である作品展を企画実行

サークル入会を希望する方へ

サークル活動の”規約”をよく読んで、ご応募ください。規約は友の会HPにも掲載しております。

○募 集

- ・年に一度、作品展開催時に募集します。
- ・所定の申込書に記入し、作品展期間中に会場の友の会受付担当者に提出してください。
- ・募集する会員は毎年各サークル4名ずつです。

システムを理解していただくための面談を経て、応募者が多い場合は抽選になります。

※詳細は別紙「2020年度募集要項」をご覧ください。

友の会へのおさそい

友の会には誰でもいつでも入れます！

(高校生以上の方なら入会できます)

*年会費 2,000円

(友の会は会費・寄付により運営されています)

会員になると、

- ・友の会活動の案内「友の会だより」
- ・サークル講習会のお知らせ
- ・そのほか博物館行事のお知らせ

をお届けします。

友の会への連絡・お問い合わせは、
kahakutomo@gmail.com
ホームページ
<http://web.tuat.ac.jp/~museum/support/tomo/>



科学博物館 ご案内

— 科学博物館 —

開館日 火曜～土曜 10:00～17:00
(ただし入館は 16:00 まで)

休館日 日曜・月曜・祝日
5月 31 日 (大学創立記念日)
夏期 8月 10 日～14 日
冬期 12月 28 日～1月 4 日
ほかに臨時休館することがあります

交 通 • JR 中央線東小金井駅
南口 徒歩 10 分
ののわ口 (Suica 利用) 徒歩 8 分
• JR 中央線武蔵小金井駅 南口
CoCo バス (中町循環) を利用して
「農工大前」下車

入館料 無料です

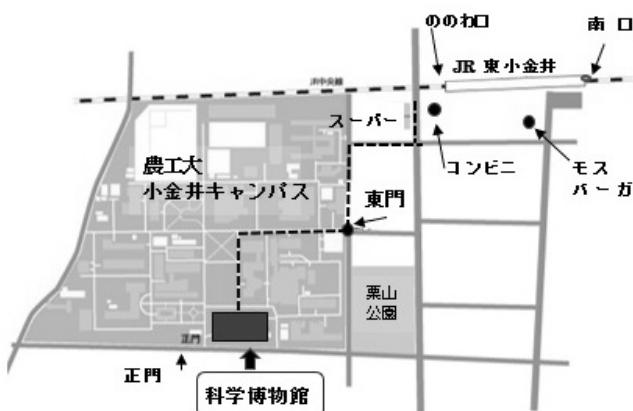
沿革・概要

JR 中央線東小金井駅から徒歩 10 分、武蔵野の面影を残した緑の中に当館があります。当館は 1886 年 (明治 19 年) に農商務省蚕病試験場参考品陳列場として創設された古い博物館です。2008 年 (平成 20 年) 工学部附属繊維博物館から、名称を科学博物館に改め、全学組織となりました。

大学の附属博物館という性質上、学術的価値のある資料が多く集められており、その時代において学生の教育上あるいは産業界の指導的役割をはたした資料多数を収蔵しています。養蚕を中心とした繊維関連の資料を展示すると共に、現在大学で進められている最先端の研究活動などについて紹介しています。

⇒博物館 HP に「科学博物館ニュース速報」を掲載し、企画展、展示替え等を 随時お知らせしていますのでご利用ください。

<http://web.tuat.ac.jp/~museum/>



繊維技術研究会 (通称 技研)

繊維技術研究会は 1999 年 (平成 11 年) に発足し、今年で 21 年となるボランティア団体です。繊維技術の伝承・研究を通じて科学博物館の活動を支援しています。繊維機械の保守管理を通じて、一般来館者や本学学生に繊維技術のすばらしさを知ってもらう、理解してもらう活動を積極的に行ってています。

● 実際に機械を動かしご案内していますので、気軽にお声をかけてください。

● 団体見学などのご希望があれば、事前にご連絡ください。

申込は博物館事務室へ (電話 042-388-7163)

● 毎月 1 回実施される会員による講演会はどなたでも聴講できます。

musset (みゅぜっと)

musset (みゅぜっと) は、2013 年 (平成 25 年) に発足した博物館支援学生団体です。科学博物館の活動を支援することによって、東京農工大学の学生に相応しい見識と能力を併せ持つ人格を形成し、社会人としての総合能力を発揮できる素養を身につけることを目的としています。

● 来館者への展示解説、展示準備や資料整理の補助を行っています。

● 小学生対象の科学実験イベント「サイエンスマルシェ」を企画実施し、近隣の子どもたちが科学と親しむ重要な機会となっています。

友の会、技研、musset 支援団体三者各々の活動、及び、それぞれの特徴を活かし相互協力して博物館の活動に貢献しております

・ ・ ・ ・ ・ 編集後記

Textile の担当をさせて頂き、各サークル活動内容を詳しく知ることが出来ました。

素材を得るために山へ材料を取りに行き、毛刈りをし、繭や綿から糸を紡ぎ、種を蒔き植物を育てるところから始まること。機械や道具の扱い方や伝統技法を学び、手間暇惜しまず、一つ一つ積み重ね作り上げて行く作業を続けていること。

また、先輩から後輩へ伝承し、館外活動や講師の方の指導を受けるなど、多くのことを学びました。でも、まだまだ解らないことも教わりたいこともあります。

友の会で学んだ貴重な体験をもとに、手づくりの大切さと楽しさを次世代へ伝えて行こうと思います
(サークル活動紹介 編集担当 藍染サークル)

Textile (東京農工大学科学博物館友の会会誌) 23 号

2020 年 1 月発行

東京農工大学科学博物館・友の会

〒184-8588 東京都小金井市中町 2-24-16

TEL 042-388-7687

FAX 042-388-7598

<http://web.tuat.ac.jp/~museum/support/tomo/>